

# 「オールラウンド型」景観まちづくり市民団体の役割

—茅ヶ崎市（仮称）河童徳利広場構想ワークショップを事例として—

## The Role of an “All-Round” Civic Amenity Society: Case Study of the Workshop for Planning of Kappa Dokkuri Square in Nishikubo, Chigasaki

岡村 祐\*・石川 雄\*\*・太田 慧\*\*・佐藤 圭太\*\*  
Yu Okamura Yu Ishikawa Kei Ota Keita Sato

### 摘要

神奈川県茅ヶ崎市で活動するまち景まち観フォーラム・茅ヶ崎（まち景）は、エリアを限定せず、かつ多数のテーマを扱う「オールラウンド型」の景観まちづくり市民団体である。一般的に、このような団体はマップづくりやイベント開催などの周知・啓発活動に取り組むことができるが、特定地域の直接の当事者でないために、地域の物的環境改善を伴う景観まちづくりに関わることは難しい。しかしながら、まち景は、2011年に市内西久保地区で取り組んだ河童徳利広場WSの開催に至るプロセス、ならびにWSの企画・運営のなかで、団体がこれまでの15年の活動のなかで培ってきた「市民性」と「専門性」の両側面にわたる強みを活かして、地域住民や専門家としての大学チームとの連携を図り、地域における広場づくり構想の第一歩を先導した。

## I. はじめに

### 1.1 景観まちづくり市民団体としてのまち景まち観フォーラム・茅ヶ崎の位置づけ

神奈川県茅ヶ崎市では、景観まちづくりに取り組むまち景まち観フォーラム・茅ヶ崎（以下、まち景）<sup>i</sup>という市民団体が創立以来15年間活動を続けている<sup>ii</sup>。とりわけ1998年から2008年まで取り組んできた「富士山プロジェクト」<sup>iii</sup>や2007年から現在まで続く「懐島プロジェクト」は、市民主体の景観まちづくりを考える上で、非常に興味深い事例である。

茅ヶ崎市では、市の景観条例に基づき、景観まちづくりに取り組む市民団体を「景観まちづくり市民団体」として認定する仕組みを有し、2011年12月現在まち景を含め、8団体がこれに認定されている。これらの団体の活動対象エリアと活動テーマを勘案すると、表1のように整理することができる。最も多いのが、エリアベースの商店会や自治会等を母体とし、ある程度活動テーマが定まっているタイプ「地縁型」である。また、海岸沿い等の特定のエリアを対象とし、そこで

様々な活動を展開する「エリア重視型」、市内全域にわたり歴史的建造物の保全や子育て環境の充実等の明確な特定のテーマを持つ「テーマ重視型」がある。こうした分類に拠れば、まち景はエリアを限定せず、かつ多数のテーマを扱う「オールラウンド型」に相当する。こうした団体は、一般的に周知・啓発用のマップの作成やまち歩きイベントなどには取り組むことができるが、特定地域の直接の当事者ではないために、たとえその意思があっても地域の物的環境改善を伴う景観まちづくりに関わるのは難しい<sup>iv</sup>。

表1 茅ヶ崎市における「景観まちづくり市民団体」の分類

	エリア限定	エリア非限定
限定 テーマ	<b>地縁型</b> ・ 松風台自治会まちづくり特別委員会 ・ 鶴が台団地自治会花とみどりの委員会 ・ 茅ヶ崎駅北口周辺特別景観まちづくり推進会 ・ ラチエン通りの安全・安心を進める会	<b>テーマ重視型</b> ・ 茅ヶ崎の文化景観を育む会 ・ 茅ヶ崎トラストチーム
非限定 テーマ	<b>エリア重視型</b> ・ 茅ヶ崎・浜景観づくり推進会議	<b>オールラウンド型</b> ・ まち景まち観フォーラム・茅ヶ崎

とはいえ、地域の景観調査や周知・啓発活動に関わっていくなかで、具体的な課題の発見やアイデアが

\*首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (10号館)  
e-mail okamura@tmu.ac.jp

\*\*首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)

生まれ、物的環境改善に対する意識が高まっていくことは十分にあり得る。事実、まち景による「懐島プロジェクト」では、地域の魅力的な景観を紹介したマップの作成を経て、地元住民とともに広場の将来像を構想するワークショップ（(仮称)河童徳利広場構想ワークショップ）の開催を実現させ、その企画・運営をするに至った。

## 1.2 研究の目的・構成・方法

そこで本研究では、茅ヶ崎市西久保地区における(仮称)河童徳利広場構想ワークショップ（以下、河童徳利広場 WS）を通じたまち景の取り組みを事例に、特定の対象エリアおよび特定の対象テーマを持たない「オールラウンド型」の景観まちづくり市民団体が、地域外部の組織としてどのように特定地域の物的環境改善を目的とした景観まちづくりに関わることができるのか、その方法論や地域への関与するなかでの役割を明らかにする。

具体的には、第一に、WS 実現に至るプロセスのなかで、まち景の組織としての特性を活かした地域へのはたらきかけの実態を（第三章）、第二に、実際の WS の企画・運営のなかで、まち景が果たした役割について分析、考察する（第四章）。

今回筆者らは、首都大チームとして専門家という立場で WS の企画・運営を担う機会を得たため、後者についてはその実践的活動のなかで観察した情報に基づくものである。一方、前者については、地元西久保自治会の会長の他、地域のキーマン S 氏（後述）、まち景副代表の T 氏に対するヒアリング調査やまち景が発行している活動報告の読み取り等に基づくものである。

と呼ばれた（図 1）。

WS 対象地の北側には大山街道が通り、北西側には小出川が流れ、その両者の結節点として大曲橋（かつては間門橋と呼ばれる）が架かり、隣接する寒川町との境界となっている。対象地周囲には、果樹園を中心とした農地が広がり、またかつての屋敷林の面影を残すタブノキがランドマークとして存在感を放っている。

一方、1980 年代以降に新湘南バイパスやさがみ縦貫道路（圏央道）といった高架道路の建設、市街化調整区域内の水田の減少など、対象地周囲の景観は大きく変容している（写真 1・2）。



写真1 小出川上流側（大曲橋）からみた対象地



写真2 小出川下流側からみたWS対象地

## II. 対象地の概要

### 2.1 WS 対象地の地理的位置

今回の WS の対象地である(仮称)河童徳利広場は、茅ヶ崎市の中央やや西寄りの西久保地区に位置する。西久保は、周囲の浜之郷、矢畑、円蔵、鶴が台とともに、かつては懐島郷(ふところじまごう)



図1 WS 対象地の位置

## 2.2 民話「河童徳利」のあらすじ

今回のWSのタイトルにある「河童徳利」とは茅ヶ崎市に伝わる民話であり、西久保はその舞台であるとされている。この民話は、若干の相違はあるが、おおむね地元の人々に以下のように伝えられている。江戸時代、間門川（現在の小出川）に三堀五郎兵衛という地元の農民がアオという馬を洗っていたところ、河童がアオを襲い、怒った五郎兵衛が近くの人と協力して河童を捕えた。命乞いをする河童を五郎兵衛が助けてやったところ、「底をたたかなければ酒がとめどなく出る」という徳利をお礼に持ってきた。五郎兵衛は酒びたりとなって仕事をしなくなったが、やせ細った飼馬アオを見て徳利の底をたたいたところ酒は出なくなり、五郎兵衛はもとの勤勉な農民に立ち返ったという言い伝えである。

## 2.3 (仮称) 河童徳利広場の歴史的経緯

西久保では、本稿で取り上げる河童徳利広場WSを含めた一連の盛り上がりの以前に、河童徳利を地域資源として活用する活動が盛り上がった時期が2度存在した。

### (1) 第1次河童徳利ムーブメント

最初の動きは1955年頃で、キーマンとなったのは西久保地区在住の郷土史家山口金治氏であった。山口は神奈川県内の郷土史家で結成された「玉石会」という会に参加していた。玉石会は昭和初期から神奈川県内の史跡めぐりを行っており、1955年には山口の住む西久保の河童徳利伝説の地を見ようと西久保を訪れている。この際に、江戸時代より伝わる「間門橋伝説河童徳利」の紙芝居、河童徳利の盆踊り、河童徳利の人形劇、河童音頭が披露されるなど、河童徳利をテーマに多様な活動が行われた。この頃、河童徳利は山口のような郷土史に詳しい人物により地区内で語り継がれることにより、地区住民が知ることとなった。山口は河童徳利を語り継ぐために重要な役割を果たしており、今回のWS参加者にも山口から河童徳利に関して話を聞いたものは多い。

この時期を第1次河童徳利ムーブメントと位置づけることができる。ただし、この動きは長くは続かなかったとみられ、河童徳利の盆踊りや河童音頭は途絶え、紙芝居や人形劇は地元小学校で細々と継承されるに留まっている。

### (2) 第2次河童徳利ムーブメント

再度河童徳利が脚光を浴びるのは1980年頃である。この頃西久保には国道1号線のバイパス道路である新湘南バイパスが地区内を通る計画となっていた。その

建設予定地に河童徳利の主人公となった五郎兵衛さんの墓があり、その移転問題<sup>9</sup>が契機となり、河童徳利が注目された。

この時期の活動の主体は、地元有志で結成した「河童徳利保存会」である。保存会は1978年には河童徳利の舞台とされている大曲橋のたもとに「民話河童徳利発祥の地」を示す看板を立てた（2011年現在、看板は河川拡張工事のため他所で保管）。一方、墓は新湘南バイパスの建設が進む中で所有者の住む静岡県に移されてしまう。

また、保存会ではこの後、1981年には民話「河童徳利」の舞台を復元する計画<sup>10</sup>を立て、市に働きかけを行った。同時に、静岡に移された墓の返還も画策した。しかしながら、いずれも実現には至らなかった。

こうした新湘南バイパス建設を契機とし、河童徳利へ注目が集まったこの時期の動きを第2次河童徳利ムーブメントと位置づけることができる。

### (3) 第3次河童徳利ムーブメント

この後、河童徳利保存会の活動は縮小していく。とはいえ、新湘南バイパスの完成（1998年）をはじめ、2000年以降農地の広がる市街化調整区域内における病院や学校の建設、それに伴う交通量の増加、さらにはさがみ縦貫道（圏央道）の高架道路やジャンクションの建設による日照や景観の悪化など、地域の環境を大きく変容させる開発が相次いだ。加えて、小出川の直線化・拡幅工事が進められ、「河童が出てきそうな雰囲気」が失われるだけでなく、かつて西久保地区の水田を潤していた西久保堰が位置を替えることにより、河童徳利発祥の地の面影が大きく失われるという問題に直面した。

こうした状況を受けて、地元の西久保自治会や生産組合は、通過交通問題の解決や民話公園整備などの要望書を市に複数回提出してきた。この地元の機運の高まりの延長線上に、今回の河童徳利広場WSが開催されることになる。この一連の動きを、第3次河童徳利ムーブメントと位置づける。

## 2.4 西久保のコミュニティ活動

まちづくりの担い手、そしてWSへの参加組織として、西久保のコミュニティ組織を整理しておく（表2）。まず、中核的組織として西久保自治会がある。自治会は、子供会をはじめとする下部組織と共に、地区の問題の話し合いやイベントの企画・運営を行う。

その他、祭り囃子や秋に自治会館で催される芸能祭での劇などの郷土芸能を伝承する活動を行う西久保祭

囃子保存会がある。保存会では、不定期に開催される河童徳利の劇でのお囃子の練習や、馬の着ぐるみや太鼓を所有している（写真3）。

もう一つ西久保における重要な組織として、農家を束ねる生産組合がある。宅地化が進行しつつある現在でも、農業が盛んに行われている地域であり、農家同士の結びつきは強い。

表2 西久保の主なコミュニティ組織

組織名称	構成員	目的
西久保自治会	地域住民	住民の親睦、地域自治
子供会	地域住民	子供に関する問題の話し合い
河童徳利保存会	有志の地域住民	河童徳利の民話の伝承、河童徳利の発祥の地を示す看板を設置
西久保祭囃子保存会	有志の地域住民	祭り囃子の保存 秋の芸能祭での河童徳利の劇を伝承
生産組合	地域の農家	農業に関する問題の話し合い、水利の管理



写真3 西久保祭囃子保存会による河童徳利の劇

### Ⅲ. 河童徳利広場WSの実現プロセスにおけるまち景の役割

本章では、第3次河童徳利ムーブメントとしての河童徳利広場WSが開催されるに至る経緯のなかで、「オールラウンド型」景観まちづくり市民団体としてのまち景の役割や戦略を考察する（図3）。また、その際にまち景に備わっている組織としての特性を「専門性」と「市民性」という2つの側面からみていきたい。これは、まち景の創設にも深く関わった卯月盛夫教授（早稲田大学）が、かつてまち景には「専門性」と「市民性」の両側面が備わっていると評した<sup>ⅳ</sup>ことを受けたものである。

#### 3.1 懐島プロジェクトの概要

前述のとおり、まち景は、2007年4月から現在に至るまで、懐島地域において歴史、地形、生活から景観を読み解く景観資源調査を実施し、景観まち歩きマッ

プやまち歩きイベントによってその魅力を伝える「懐島プロジェクト」に取り組んでいる。また、当プロジェクトでは、懐島地域を「浜之郷・矢畑」と「円蔵・西久保・鶴が台」に二分し、2期に及ぶプロジェクトとした。

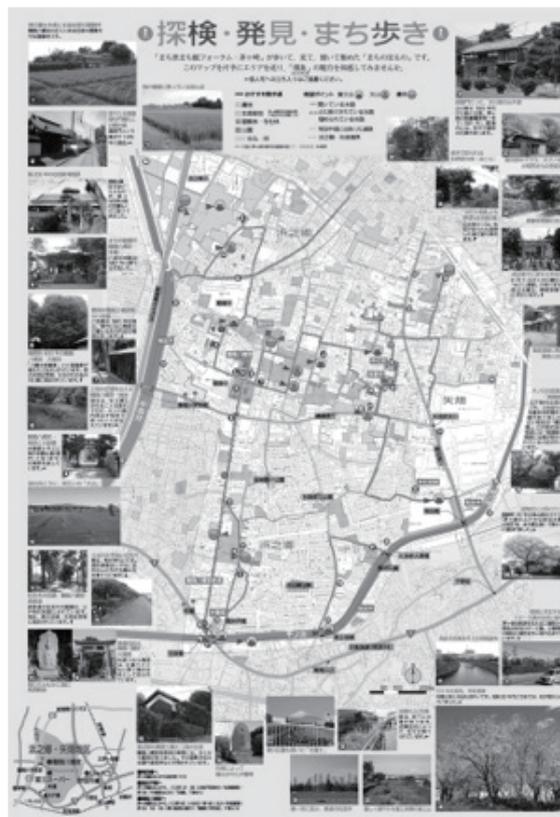


図2 完成した景観まち歩きマップ(浜之郷・矢畑編)

#### 3.2 懐島プロジェクトからの展開

第1期の『浜之郷・矢畑編』（図2）では、地域住民に対するマップ完成報告会等を通じて自治会を中心にまちづくりにつながる気運が高まったかにみえたが、まち景としても適切な支援方法が見出せず、この動きは具体的な動きにつながらずに終わってしまった。

第2期の『円蔵・西久保・鶴が台編』に今回のWSの対象地が含まれる。まち景は、マップの表紙という、いわば地域を代表する景観として当地のタブノキを採用し、景観的魅力をアピールした（写真4）。これはメンバーの主観的判断ではなく、地域全体の空間構造の解釈、道路形成年代の把握、樹木（屋敷林）や石仏などの分布などの客観的な景観調査を通して得られた結論であった。上記の調査は、計画段階での専門家（筆者）のアドバイスはあったものの、調査自体やまとめについてはまち景自身によるものであり、景観まちづくりに10数年取り組んできたある種の専門的見地からの着眼であった。

また、当時の議論を振り返ると、小出川の河川拡幅による自然環境の変化、昭和初期建設の堰の撤去、周囲の高架道路建設による眺望景観の悪化など、当地が抱える様々な問題が浮かび上がっていた。つまり、景観上のポテンシャルを有していると同時に、改善すべき問題が山積している空間であるという認識があった。



写真4 『景観まち歩きマップ (円蔵・西久保・鶴が台編)』の表紙

ここまでのプロセスでは、まち景の持つ「専門性」を活かし、地域の景観的ポテンシャルが見出されたわけだが、第1期同様に、地縁組織でなく直接の当事者ではないまち景だけで、具体的な景観まちづくりとしての動きに展開させていくのは難しい。

そこで力を発揮したのが、まち景の持つ「市民性」の側面である。まず、まち景が頼ったのが、古くから交流があり、様々な市民活動に積極的に参画してきた地元農家のS氏<sup>viii</sup>であった。S氏にはマップ完成後のまち歩きイベントの際の現場解説を依頼するなどし、徐々に交流を深めていった。そのなかで、第2章で述べた地元西久保の地区住民が民話公園の広場を熱望し

ているという情報を入手する。

まち景としては、行政への要望という形だけでなく、地区住民の総意に基づく運動として展開していくこと、また具体的な空間像を描いていくことの必要性を感じ、S氏を仲介役として地元西久保自治会への接触を図り、今回の広場構想WSの提案を行った。まちづくりの経験の乏しい西久保自治会は、はじめワークショップという手法に躊躇するという局面もみられたが、まち景のマップづくりの実績や同じ市民としての立場からの熱心な説得により、西久保自治会主催という形で河童徳利広場WSが開催されることとなった。

### 3.3 まち景の「専門性」と「市民性」

このように、景観調査やマップ作成から当地の景観的ポテンシャルを見出したこと、西久保地区の第3次河童徳利ムーブメントを「まちづくり活動」へと昇華していく必要性を感じてWSを提起したことは、まち景に備わっている「専門性」の側面に拠るものであった。

一方、市民グループとしてのネットワークを活用したS氏とのつながりや西久保自治会への接近、また同じ市民の立場からの熱意ある自治会への説得は、「市民性」の側面が活かされたものであると言える。

## IV. 河童徳利広場WSにおけるまち景の役割

### 4.1 ワークショップの体制・目的

以上の経緯を踏まえて西久保自治会の主催、そしてそれをまち景が支援するという形で、河童徳利広場

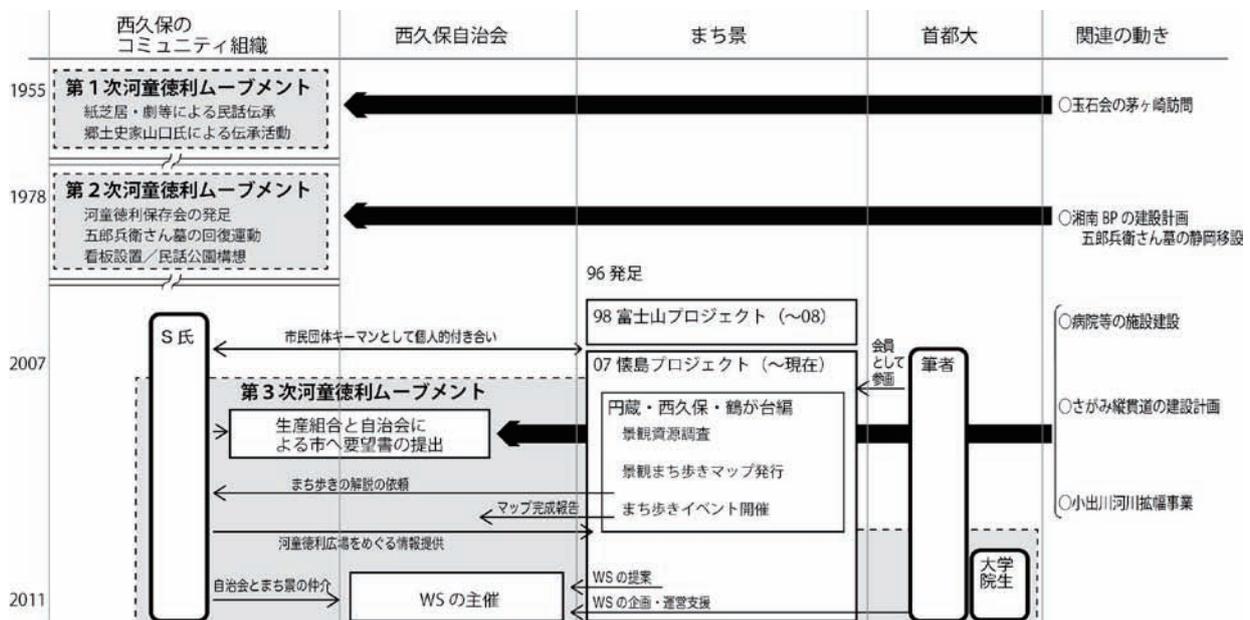


図3 河童徳利広場WS実現までのプロセス

WS の企画が進められた。また、さらにまち景のメンバーでもある筆者（岡村）が率いる首都大チーム（石川、太田、佐藤）が、専門家集団として企画・運営に加わった。

WS への参加者は、西久保自治会メンバーを中心に、こども会、生産組合、西久保祭囃子保存会、河童徳利保存会といった地域の主要なコミュニティ組織が名を連ねた。

これまでも地元において、広場整備に向けた気運の高まりがあったことは先に第三章で述べたが、そこから時間的に大きな隔たりがあるということと、より多くの地域住民の参加のもと河童徳利広場周辺の歴史や生活文化を掘り起こし、将来構想を描くことが重要であると考え、第一に、(仮称)河童徳利広場周辺の歴史や生活文化を掘り起こすこと、第二に、地域の思いを形にし、利用方法や将来空間像を描くことの2点を目的とした4回にわたるWSが企画された(表3・図4)。

#### 4.2 各回の概要

第1回は、「思い出ワークショップ」と題し、広場にまつわる思い出やエピソードの掘り起こし、河童徳利の伝承を共有することを目的として開催された。参加人数は19人である(まち景及び首都大を除く、以後同様)。WSの前半では、実際に広場現地内やその周囲を視察し、「昔はここに池があり木に登って飛び込んだ」、「ここにはかつて松の木が何本もあった」などの話題を引き出すことができた。それらの話をガリバーマップ(3×3mサイズ、縮尺1:100の巨大地図)へ書き込み、整理と共有を行った。WSの後半は、河童徳利保存会の年長者から過去の取り組みの説明や「徳利」のレプリカや河童徳利の民話の様子が描かれた掛軸などの品物が披露され会場の雰囲気盛り上げた。

第2回は「アイデアワークショップ」と題し、広場活用のアイデアを集め、それらを踏まえてテーマ別に広場のデザインを大まかに考え、広場の素案を得ることを目的とした。参加人数は22人である。WSの冒頭、公園整備の事例紹介を首都大チームが行った。その後、参加者を3班に分け3テーマずつ2回の議論を行い計6テーマについて広場のデザイン案をまとめ、発表を行った。テーマは初回の内容を踏まえて予め用意した「民話、歴史、水辺、休憩・産直、遊び場、散歩道」の6つである。各班にファシリテータ(まち景、首都大から1人ずつ、計2人)が付き、議論を先導した。自由な発想でアイデアを出し、その結果、河童の出そうなビオトープやせせらぎをつくる、見晴らし台をつくる、小出川沿いに散歩道を整備する、サイン計画、樹木の説明やイベント案、産直などハード面からソフト面まで内容は多岐に渡った。

第3回は「デザインワークショップ」という位置付けで、14人の参加があった。これまでのアイデアや議論を踏まえ、広場のデザインや使い方について議論し共有することを目的とした。WSの前半は広場デザインを具体的に形成するため、前回WSで得られた素案をコンセプトの異なる3つの広場計画案に落とし込み図面化したものを首都大から提案し、全体で議論した。3案の各コンセプトは「民話重視型」、「景観、眺望重視型」、「自然レクリエーション重視型」である。図面化したことで、空間の魅力や課題が鮮明になった。WSの後半は、「民話」、「遊び場」、「産直」の3班に分かれ、広場でどのような活動が想定されるか、またそのために必要なハード面の整備、及びソフト面の取り組み(運営方法、イベント案)などについて議論、発表を行った。

「まとめワークショップ」とする第4回では、これ

表3 WSの各回の概要

	参加人数	位置付け	目的	運営側キーワード	手法	得られたアイデアなど(抜粋)	成果
第1回 7/24	19	思い出ワークショップ 「みんなの思いを集める」	広場にまつわる思い出やエピソード、河童徳利の伝承を共有する。	河童徳利 大山道 広場での思い出 ガリバーマップ	現地を実際に歩いて回り、エピソードを呼び起こす。年長者から河童徳利の伝承を聞き共通認識を形成する。河童徳利にまつわる物に触れ実感を覚える。	堰の遺構 堰の記念碑 山への眺望 赤池 片堂のアシ 水田 産直 ビオトープ モニュメント 遊んだ思い出	現地を歩いたことで参加者が思い出やエピソードを活かき話と語ることができた。
第2回 8/21	22	アイデアワークショップ 「みんなの思いを共有する」	広場活用のアイデアを集め、テーマ別に広場のデザインを大まかに考える。	民話 歴史 水辺 産直 遊び場 散歩道	初回のWSで得られた思いを出し合い、議論を行う。6つのテーマを設け、テーマ毎にチームに別れ、KJ法でアイデアを整理、発表する。	サイン計画 川沿いの整備 せせらぎ 池 遊具 ステージ 樹木/植物 広場のイベント案 民話イベント	縛りのない自由な発想を活かすような議論を心がけたことで、広場に対する夢を膨らませることができた。
第3回 9/25	14	デザインワークショップ 「みんなの思いを形にする」	過去2回のWS踏まえて、具体的な計画案としてまとめるために、広場のデザインや使い方について議論し、共有する。	広場3案の図面 広場の将来像について議論	前回までの議論から、ある程度現実味のある広場3案を提案。その後、遊び場・民話・産直の3グループに別れ、各テーマについて具体的に議論。		広場についての具体案を提示したことで、広場整備についての問題点を指摘、議論することができた。
第4回 11/6	19	まとめワークショップ	全4回のWSでの議論をまとめる。その上でこれまでの取り組みを今後も継続するための方針を議論し、抱負を語る。	広場の模型 広場連携の議論	これまでの議論から制作した広場模型を囲み議論する。		模型の完成とそれを囲んだ議論によって、広場完成へ向けた地域の意識を一つにまとめることができた。

までのWSの成果として、広場構想を一つの案にまとめるとともに、今後も継続的に活動を行っていきける意思統一を図るために、班に分けることはせず、議論そのものを全体で共有した。首都大チームが広場の最終提案図面とその模型（縮尺 1:200）を提供した。参加者全員で一つの模型を囲み、共通理解を図った。また、まち景や首都大チームからWS後の継続的な活動が重要である旨の発言があり、これは自治会長はじめ地域住民の共感を得ることができた。

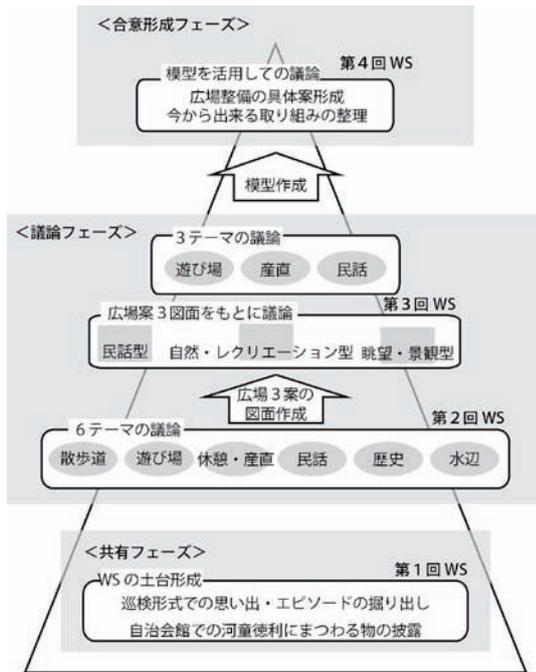


図4 4回のWSの関係性

#### 4.4 WSの企画・運営におけるまち景の役割

この一連のWSの企画・運営に関わった景観まちづくり市民団体としてのまち景の役割とそれを可能にしたまち景に備わっている特性を分析していく。

図5は、WS各回での企画・運営側のまち景及び首都大チームの役割とそれに応じた地元西久保の動きを整理したものである。まち景に関しては、前章同様に「市民性」と「専門性」の側面からその役割をみている。その結果、まち景の役割として、以下の3点に言及することができる。

第一に、まち景は今回のWSのなかで、主たる企画・運営者である首都大チームと参加者である西久保をつなぐ事務局としての役割を果たしてきた。日程調整、プログラムの確認などが具体的な内容である。これは、一般的に多くのまちづくりのWSでは、行政あるいはコンサルタントが担う役割であるが、景観まちづくり市民団体としてWSのマネージメントを担当した。

第二に、まち景はWSの企画・運営者としての役割も担ってきた。第1回WSでの広場や地域に関する景観的な観点からのガイド・解説は、過去の調査やマップ作成の蓄積を活かしたものであり、まち景の「専門性」の側面を活かしたものである。さらに、第2回、第3回WSでは、首都大チームとともにファシリテータとして、各グループの議論に加わった。そのなかで、地域の地名、建物名、人名等市外の人には理解が難しい情報を首都大メンバーに伝えるという情報の媒介者

凡例		参加者		
まち景の役割 (市民性)	○----->	西久保 (地元)	まち景	企画・運営
まち景の役割 (専門性)	○=====>			
首都大の役割	■=====>			
		WSの主催 (自治会) ←-----○ 自治会に主催の要請	WS開催の働きかけ ○	企画・運営の支援要請 →
		地域の各組織へ参加依頼	地元新聞記者への情報提供	
①	思い出WS 7/24	過去の取り組み紹介 西久保地域のまち歩き 現地視察・WS	河童徳利保存会の取り組みの紹介 広域的な位置づけの理解 景観的価値の再認識 思い出・伝承の共有 地域の各組織へ参加依頼	マップ製作を活かしたガイド マップ製作を活かした景観資源の解説 WSファシリテート 第1回WSまとめの作成
②	アイデアWS 8/21	公園整備事例紹介 テーマ別アイデアWS	整備イメージの醸成 テーマごとのアイデア出し 地域の各組織へ参加依頼	WSファシリテート 地元情報の翻訳/伝達/媒介 ○-----> 地元のニーズの正確な把握 議論の先導/事例紹介 第2回WSまとめの作成
③	デザインWS 9/25	空間像に関するWS 使い方に関するWS	広場の空間配置の議論・共有 地域の各組織へ参加依頼	WSファシリテート 地元情報の翻訳/伝達/媒介 ○-----> 地元のニーズの正確な把握 議論の先導/事例紹介 第3回WSまとめの作成 最終コンセプトを議論/模型製作への参加 ○-----> 最終案の作成 (図面・模型)
④	まとめWS 11/6	最終案に対する議論 今後の展望に関する議論	整備イメージの共有 継続的活動の重要性を認識	最終案の提案 継続的な活動が広場整備に つながることを主張 最終案の修正/第4回WSまとめの作成 懐島PJ活動報告の発行 (情報発信)

図5 4回のWSの関係性

の役割を果たし、各グループでの議論をスムーズにしていった。専門家としての首都大、そして市民としてのまち景のペアによるファシリテーションが功を奏したと言える。

第三に、地域外への情報発信である。まち景は、「懐島プロジェクト」を遂行するにあたり、適当な時期に随時活動報告を発行してきた。これは、市役所の関係課にも配備され、また多くの関係者に直接郵送されている。その13号と14号に当たる活動報告が、このWSの間に発行され、地域の動きを広く外に伝えた。また、面識のある地元神奈川新聞の記者に情報提供をすることで、取材を受け新聞での報道を実現させている(図6)。

また、上記の3点に加えて、西久保の住民と同じ市民として(仮称)河童徳利広場の整備を願う立場を取るまち景の存在は、地元にとっては応援団として非常に心強い存在であったと言える。行政であれば担当者の交代によって、外部の委託業者であれば予算の切れ目によって、継続的な支援とならない場合もあるが、茅ヶ崎市に根を張る景観まちづくり市民団体としては、継続的な支援が期待できる。



図6 第1回WSの様子を伝える新聞記事  
(神奈川新聞 2011年7月25日朝刊)

## 5. まとめ

本稿では、対象エリアや対象テーマを限定しない「オールラウンド型」景観まちづくり市民団体が、いかにして具体の地域の環境改善を伴う景観まちづくりに関わっていけるのか、という課題に対して、茅ヶ崎市のまち景まち観フォーラム・茅ヶ崎の取り組みを事例に、その方法論や組織として必要な能力について検討してきた。

地域での地道な景観調査やそのアウトプットとしてのマップ作成といった団体としての「専門性」、また広いネットワークや情報収集・発信能力といった「市民性」の両側面によって、地域の信頼を獲得し、地域住

民や専門家としての大学チームとの連携を図り、地域における広場づくり構想の第一歩を先導した。また、こうした団体としての能力の問題とは別に、団体の「市民でなければできないことを市民でなければできない方法で人の輪が広がるように活動する」という活動方針に合致していたという点も付言しておく必要がある。

一方、地域の側からすると、まち景のような景観まちづくり市民団体はありがたい存在であると言える。特に地域が要望型から提案型へとシフトしようとした場合に、市のなかで用意されている市民活動助成の仕組みを活用するには少しハードルが高い。同じ市民である応援団として、また専門性を持つ景観まちづくりに長けた組織としてのまち景の支援はとても重要である。

おそらく今回のケースのような支援を必要としている地域はたくさんある。もちろん景観まちづくり市民団体にも限界はあるが、いかに両者のニーズをマッチングさせていくかも今後の課題であろう。

## 参考文献

- 岡村祐・高見澤和子(2009):市民団体による眺望景観保全の取り組み -まち景まち観フォーラム茅ヶ崎による「富士山プロジェクト」(1998年~2008年)、日本建築学会大会(東北)都市計画部門研究懇談会資料集、pp.61-64
- 岡村祐(2010):「地域資源インベントリ作成の方法論構築に向けて -茅ヶ崎市及び韮崎市における取り組みに基づいて-」、観光科学研究、No.3、首都大学東京観光科学域、pp.71-77

<sup>i</sup> まち景の母体となったのは、茅ヶ崎市が景観基本計画を策定するにあたり募集した景観資源調査の市民ボランティアであった。

<sup>ii</sup> 所属会員は10数名いるが、常時活動しているのは6、7名である。主力メンバーは、長年市民活動に取り組んできた女性、地域情報誌記者を経験してきた女性、一般企業をリタイアした男性数名、そして筆者(岡村)等から構成される。

<sup>iii</sup> 「富士山プロジェクト」の詳細は、岡村ら(2009)で報告されている。

<sup>iv</sup> ただし、市民の共有財産としての景観を阻害するマンション開発に対する反対運動等については、他の団体等と協働しながらそのなかで何らかの役割を果たすことはあり得る。実際、まち景では富士山プロジェクトのなかで、海岸沿いのマンション建設計画に対して市内の5団体ともに反対運動に参画した。

<sup>v</sup> 五郎兵衛さんの墓は子孫の家の敷地内にあったが、

そこが道路用地になるため、墓は移転することになったが、西久保ではこれを大曲橋のたもとの河童徳利の舞台となった場所に移したいとし、それに向けた動きが始まった。

- vi 1500 m<sup>2</sup>の土地に昔の面影を残す間門川を掘り、土橋の設置や松の植樹による史跡公園を提案した。
- vii 2006年に開催されたまち景創立10周年記念パーティでのコメント。
- viii 三翠会という市民団体を立ち上げ活動していた。

### 河童徳利発祥の地ひろば

2011年 復興まちづくり計画

